



われかく戦えり

小松電機産業株式会社

代表取締役社長

小松 昭夫 氏

ポンコツ車と10万円で創業 ベンチャー企業の雄・誕生

島根県の松江市郊外に小さな村がある。その村にベンチャー企業として勇名をはせる企業がある。

高速自動シャッターと集落の上排水集中管理装置を開発し、商品に育て上げた小松昭夫氏である。

手形や納品書も知らない世間知らずの研究者が、ここまでたどりついたその軌跡を小松社長に振り返ってもらった。

新入社員は情報通

——高卒の新入社員が社内一の情報通であったとか…。

〔小松〕私が長男であったことと家庭が厳しい状況だったので、近くで就職しようとしたのですが、私が機械の出身なので宍道のオーエム紡機製作所か佐藤造機しかありませんでした。

で、私の叔父が経理課長をしている農機具メーカーの佐藤造機に入社しました。その時、既に農機具の情報に関しては社内ナンバーワンでした。

なぜかと言いますとね。学生の頃ですが、秋の収穫祭というか農業祭には必ず農機具の展示会がありました。その展示会で農機具のカタログや営業資料を集めましてね。それを分析するんです。

佐藤造機の社員だと、よその展示会へ行けばすぐに分かりますよね。ところが、学生服の私が行けば仕事に関係ないとみて、いろんな資料をくれるんですよ。なかなか熱心じゃないかと笑いながらね。

そのデータを徹底的に分析するんですが、好きだから楽しんでね。だ

から、入社した時には他社の農機具に関する情報をつかみ、研究所でそれを生かすことが出来たというわけです。

——佐藤造機ではどんな仕事を…。

〔小松〕研究所にいました。研究所というのは、外部の人とみだりに会えなかった。一度タイムレコーダーに入れると、外部の人と会うには全て許可がいるんです。

秘密保持ということがあってね。ですから、会社内では完全な隔離社会でした。農機具の業界では特許戦争がすごかったのでね。

そういう中で8時間勤めていたから、社会の事が全然分からなかったんです。小切手を見たこともないし、納品書なんて全く無縁の世界でしたからね。

ところが、ローカルにおりますとね。クボタとかイセキとはどうして

代わりに今度は、「小松には配電盤は一切出すな」と言い、ピターッと配電盤の注文が来なくなりました。

私は受けて立ったものの「小松が倒産」といううわさが、パーッと流れたんです。それで、銀行へ行っただろうから心配するなどと説明しました。

地元はいろんな形で全部つながっていますから、あらかじめ説明をしたわけでは、いざという時には借りなければならんと言うことです。

——さてそれで、シートシャッター“門番”になるわけですが。

〔小松〕最初、三菱農機からこんなシャッターを作ってほしいと依頼がありましたね。

というのは、工場へ出入りする工員は手に材料や工具をかかえているので、出入りの際はその度に資材を降ろしてシャッターを上げ、中へ入ったら又資材を降ろして締めなければならぬし、材料などを満載したトラックなども、その度に運転手は降りなければならない。

そうした面倒を省く自動シャッターを作れと言うことでしたが、失敗の繰り返しでした。

苦労したのは、センサーで感知するとシャッターを高速で巻き上げ、通過するとすばやく外部としゃ断す

ること、それにセンサーの位置や角度ですが、この過程で異業種交流グループの協力が得られたことは大きな成果でした。

この高速自動シャッターの開発により、製品や資材などの搬出、搬入に要する時間が省力化されることや、屋内の冷暖房の熱を外部に逃さず、ホコリの流入を防ぐなどの効果を持つ画期的なものでした。

許せぬ争いに新たな闘志

——このシートシャッターの発売で会社の基盤が出来上ったと思いますが、最近の新聞報道によるとシートシャッターに関する訴訟で会社にとって不利な判決が出ていたようですが…。

〔小松〕全国に販売のネットワークを作ることは大変なので、文化シャッターと業務提携をした際、いろんなことはあったのですが、新聞へ文化シャッターと同時発表をして「門番」というブランドを守ったわけです。

丁度その頃、“門番”の販売店であった全国に営業所をもつ、スイングドア業界のトップメーカー(株)ユニフローがよく売れるものだから、ユニフローのブランド名で作ってくれとの申し入れがありました。しかし過去にカタログの盗作もあり、その店

の対応に於いて、不信な点がいっぱいあったので、当社はノウハウまで盗られてはと、OEM(相手先ブランド契約)の申入れを断りました。

そしたら、制御盤とかユニットスイッチを外で開発させ、本体はそっくりそのまま、部品も互換性があるようにして作ったんです。

自分のところで一切手を汚さずに部品の互換性まである。こんなことが許されたら大変ですよ。

こんなことをしているから、日本はね、世界から叩かれるわけですよ。だから、直ちにね。広島高裁に上告しました。

私がこんなことが出来るのは、銀行にも頭を下げなくてもよいし、会社を大きくせずに税金をメチャクチャ払ってますから…。払いながら進むことも出来る、立ち止ることも出来る、退くことも出来る…こういう状態をキープして、しがらみを作らないようにしてきたからこそ、こんなことが言えるんです。

ほとんどの企業が、いろいろなしがらみがあって訴訟など出来ないの、泣き寝入りをしているというのが実態です。

——これから勝訴に向けて新たな闘いが始まるわけですが、ご健闘をお祈りして終わります。ありがとうございました。

